

応用生態工学研究会ニュースレター N o. 1 0

Ecology and Civil Engineering Society (E C E S)

2000年(平成12年)2月29日(火)発行

[発行所] 応用生態工学研究会事務局:〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル 226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

[発行者] 応用生態工学研究会(編集責任者:幹事長 谷田一三, 事務局長 熊野可文)

第10号 目次

はじめに

1. 第10回理事会報告
2. 福岡基礎講座「多様性と保全の生態学」開催報告
3. 名古屋「多自然型川づくりシンポジウム」開催報告
4. 仙台基礎講座開催案内
5. 国際交流・海外学会等への派遣者募集!
6. 国際交流計画による招聘
7. 会誌編集委員会報告
8. いろいろなニュース
  - (1)学会・シンポジウム開催案内
    - ・第1回生態系モデリングシンポジウム「生態系とシミュレーション」  
(主催:国際生態系モデリング学会)
    - ・「わが国の失われつつある土壤の保全をめざして~レッド・データー土壤の保全~」  
(主催:日本ペトロジー学会)
  - (2)新著紹介
    - ・「潮間帯の生態学(上・下)」デイビッド・ラファエリ&スティーブン・ホーキンス著、朝倉彰訳
    - ・「魚の分類の図鑑—世界の魚の種類を考える」上野輝弥・坂本一男著
    - ・「土石流災害」池谷 裕著
    - ・「熱帯雨林」湯本貴和著
    - ・「水辺のさんぽ」新学社編集部編
9. 事務局報告

はじめに

2000年2月8日の第10回理事会では、会誌編集委員会の新しい委員も決まり、いよいよ2000年度(平成12年度)に向けた体制が整いました。

2000年度も、総会・研究発表会、基礎講座を開催し、現地討論・国際交流も始まります。

会誌への投稿お願い申し上げます。

1. 2000年度年会費の振り込みを!

当研究会の2000年度(2000.4/1~2001.3/31)年会費未納の方は、2000年3月31日までに振り

込みお願い申し上げます。

年会費:正会員(5,000円)、学生会員(2,000円)、賛助会員(1口につき100,000円)

[振り込み先]

・郵便振替口座:

(加入者名)応用生態工学研究会  
(口座番号)00140-7-404275

・銀行口座:

(口座名称)応用生態工学研究会 熊野可文  
(銀行名支店名)あさひ銀行麹町支店  
(口座番号):(普通)No.3686728

2. 会誌への投稿を!

会誌「応用生態工学」の2000年度の編集スケジュールは以下の通りです。この目安に沿って、原著論文・短報・総説・意見等を会誌編集委員会までお寄せ下さい。

—会誌発行予定—

<3巻1号発行>

2月末:意見・用語解説・書評投稿期限目安

5月末:発行予定

<3巻2号発行>

5月末:原著論文・総説投稿期限目安

7月末:短報投稿期限目安

8月末:意見・用語解説・書評投稿期限目安

11月末:発行予定

—意見募集—

会誌では、多自然型川づくりについての意見原稿を募集しております。3巻1号では、名古屋シンポの講演者による「意見」が掲載される予定ですが、これに加えて会員の皆様からの投稿記事を集めた「意見特集」を組んで参りたいと存じます。刷り上がり1頁(2,000字程度)の短いものでも結構です。河川工学や生態学の研究者の眼のみならず、行政や民間会社の方々の体験や感想に基づいた意見も掲載いたします。奮って投稿下さい。

—和文英訳プロ紹介—

会誌への投稿にあたって、原著論文・総説・短報等に、abstract等の英文が必要となります(投稿規程参照)。この英文については、著者

の責任において完成させるとこになっておりますが、英文を苦手とされておられる方には、そのプロを紹介します。費用は著者負担です。研究会事務局までお問い合わせ下さい。

(会誌編集委員長竹門康弘)

### 3. 仙台基礎講座受講申込み開始！ P.10参照

2000年5月26日（金）、仙台・東北大医学部「艮陵会館」において、生態学の基礎講座を開催します。受講申し込みを開始しますので、参加希望者は、事務局まで申し込み下さい。仙台での実行委員会参加希望者を募集しています！

### 4. 国際交流・海外学会等への派遣者募集！

P.10参照

当研究会から、海外における学会等への正式派遣を2000年度より開始します。御希望の方は是非申し込み下さい。（申し込み期限2000年3月20日）

## 1. 第10回理事会報告

2000年1月20日（木）の第11回幹事会を経て、2月8日に第10回理事会を開催し、1999年度（平成11年度）の総括、2000年度（平成12年度）の事業計画・活動方針の審議を行った。以下理事会での審議・決定事項を報告します。

日時：2000年2月8日(火) 17:45～20:30

会場：「麹町会議室」

出席：川那部、廣瀬、山岸、石川、楠田、國井、小林、玉井、半田、谷田、（事務局）熊野  
審議決定事項：

### 1. 事務局体制について

- 1) 2000年3月31日が任期となる、熊野事務局長の任期を延長する。任期延長にあたっては、出向・給料（年間70万円）等条件は今まで通りとする。
- 2) 事務局次長の問題を含め、今後の事務局体制については、なるべく早くその具体策を立てる。

### 2. 名誉会員について

- 1) 2000年度（第4回総会）において名誉会員を推薦選出するかについては、次の理事会までその結論は保留する。
- 2) 基本的には、名誉会員の選挙権・被選挙権、会誌・ニュースレター・事務局からの各種連絡送付等サービスは受けるものとして、会費（無し又は半額等が考えられる）や、関係する規約・細則の細部検討などをして、次回理事会で再度審議する。

### 3. 1999年度総括

#### 1) 経過報告

##### (1)会誌

2巻1号 1999.5.31発行

2巻2号 1999.11.19発行

#### (2)ニュースレター

- No. 7号 1999.6.21発行  
No. 8号 1999.8.10発行  
No. 9号 1999.12.10発行  
No.10号 2000.2.29発行

#### (3)第3回総会・研究発表会

1999年9月18日（土）～19日（日）開催、  
科学技術館サイエンスホール  
総会出席者：正会員68名  
全体出席者：191名（霞ヶ浦現地含む）

#### (4)講座・現地セミナー等の開催

##### ①札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」

開催 7月17日～19日（220名受講）  
講座主任：鷲谷いづみ  
講 師：橋川次郎、谷田一三、中村太士  
□札幌研究実行委員会（8機関19名参加）

##### ②「霞ヶ浦現地見学会」開催

9月20日（41名参加）  
主 任：鷲谷いづみ  
現地案内：飯島 博（霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議事務局長）、潮来 ジャランボ・プロジェクト実行委員会（永長郁夫会長、塚本勝事務局等）、建設省霞ヶ浦工事事務所 富田所長、水資源開発公団霞ヶ浦 開発総合管理所 住谷所長  
□東京研究実行委員会（10機関22名参加、第3回総会・研究発表会を担当）

##### ③福岡基礎講座「多様性と保全の生態学」

開催 11月26日～27日（236名受講）  
講座主任：鷲谷いづみ  
講 師：江崎保男、竹門康弘  
□福岡研究実行委員会（8機関25名参加）

##### ④名古屋「多自然型川づくりシンポジウム」

開催 2000年1月13日（165名参加）  
交流委員会委員長：辻本哲郎  
講 師：吉村伸一、池内幸司、浅枝 隆、角野康郎、森 誠一  
□名古屋研究実行委員会（8機関25名参加）

#### (5)奨励研究

4名応募、3名採択  
(各30万円、計90万円支給)

#### (6)国際交流

今年度は実施せず。

#### (7)会員状況報告（2000.2.7現在）

正（学生）会員 971名、賛助会員60法人

#### 2) 1999年度決算予測

1999年12月末決算から予測すると、年度末決算は、

ほぼ予算通りとなる。

#### 4. 2000年度の事業計画

##### 1) 講座・セミナー等の開催（普及委員会・交流委員会関係）

(1) 2000年5月末ごろ：仙台にてセミナー又は基礎講座開催（担当役員：小野監事）

①小野監事の紹介により、東北大学の関連研究者に相談する。

②実行委員会については、事務局が昨年12月仙台に行き、コンサルタント等への働きかけを既に進めており、7社が実行委員会参加を表明した。

(2) 9月ごろ：『現場で川づくりを議論するin札幌（仮称）』（担当役員：中村幹事）

札幌付近2～3河川について現地で各分野専門家による議論実施。

(3) 10月9日（月）：『琵琶湖現地見学会』（担当役員：山岸副会長、江崎理事、谷田幹事長）

10月7～8日第4回総会・研究発表会後、連続して9日（月）に琵琶湖現地見学会を実施。

(4) 10月末：『現場で川づくりを議論するin矢作川（仮称）』（担当役員：辻本理事）

矢作川現地を見ながら、いろいろな分野の専門家を集めて議論する場を設ける。

なお、9月札幌、10月末矢作川については、1月13日名古屋で実施した「多自然型シンポジウム」と一連のものであり、全体を総括して2001年東京（その近郊）でシンポジウム開催を計画する。これら、一連のものについては、ネーミングを検討する。

##### 2) 第4回総会・研究発表会（大会開催運営委員会関係）

（以下は、12月23日「琵琶湖大会企画会議」、1月20日「第11回幹事会」を経て、理事会で承認された）

(1) 開催日時：2000年（平成12年）

10月7日（土）～8日（日）

一現地見学会を9日（月）<体育の日>

(2) 会場：滋賀県立琵琶湖博物館

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

(3) 懇親会：10月7日（土）17:30～

琵琶湖博物館内ミュージアムレストラン  
「にほのうみ」で開催

(4) 交通手段：草津駅→琵琶湖博物館の近江バスが出ていて、便数も結構ある。場合によっては、事前に近江バスに相談して、必要時間帯に増便してもらう交渉をする。

(5) 公開討論会（仮称）：

テーマ：河川生態系の保全：その思想と実践

招聘者：（調整中）

——この企画は、応用生態工学研究会が、その研究活動の1つの柱としている国際交流の具体的な計画（「国際交流招聘計画案」全体タイトル『応用生態工学の国際的ネットワークの構築』別項参照）の一環である。

(6) 琵琶湖現地見学会：10月9日（月）

①竹生島やアユ人工河川等および湖岸の見学を検討する。

②舟による現地見学を検討する。

③研究発表会で、“琵琶湖ミニシンポ（仮称）”を組み込む。

(7) 実施体制

①「大阪研究実行委員会」の組織を強化して、準備等を行う。

②国際交流については、幹事長及び交流委員会を中心として準備し、招聘者との調整を行う。

(8) その他特別企画等

①大会開催時、参加者が琵琶湖博物館も観覧できるように、団体入館（大人一人400円）し、それを研究発表会参加費に含める。

②ヨシの紙を使った似顔絵書きを懇親会で行う。

#### 3) 会誌編集

(1) 会誌の発行

① 3巻1号発行：2000年

2月末 意見・用語解説・書評投稿期限目安

5月末 発行予定

② 3巻2号発行：

5月末 原著論文・総説投稿期限目安

7月末 短報投稿期限目安

8月末 意見用語解説・書評投稿期限目安

11月末 発行予定

(2) ニュースレターの発行

① No.11号発行 2000年6月（札幌シンポ、第4回総会・研究発表会案内等）

② No.12号発行 2000年9月（第4回総会・研究発表会、矢作川案内等）

③ No.13号発行 2000年11月（各種開催報告）

④ No.14号発行 2001年2月（2000年度総括、2001年度会費請求）

4) 国際交流（交流委員会関係）

I. 海外関連学会への派遣

(1) ニュースレターNo.10（2000年2月29日発行本号）において、2件の海外での学会・シンポジウムを紹介し、参加希望者を募る。

(2) 参加申し込み期限は、2000年3月20日までとし、交流委員会にて審査人選する。

(3) 派遣に必要な予算は、総額300,000円以内の渡航費とする。

(4) 賛助会員等、各法人に社員等が参加しやすく

なるよう、協力のお願いを事前にする。

(5)今後は、かなり早い時期(2年~3年前)から準備・参加募集をする。

(6)今後、応用生態工学研究会の国際的認知等のため、理事・副会長・会長など責任ある者の派遣も検討する。

【応用生態工学研究会 海外学会等への派遣者募集要綱】(別項参照)

## II. 国際交流招聘計画

(1)招聘するにあたっては、「外国の方にお教えいただく」といったことではなく、「応用生態工学」についての理解を得て、相互の交流と、応用生態工学の発展に期するものでなければならない。

(2)2000年度は、招聘者と調整し、「河川整備基金」への申請を始め、準備作業を進める。

【応用生態工学研究会 国際交流招聘計画案】(別項参照)

## 5) 奨励研究(研究開発委員会関係)

### (1) 奨励研究

①2000年度は1999年度に引き続き、奨励研究募集を実施する。

②採択は、1999年度と同様3件程度、各30万円(計90万)とする。

③1999年度は、応募が4件であったことから、2000年度ではその増加を図る。

### (2) 自主研究

自主研究については、実施可能な場合は実施する。

## 6) 2000年度仮予算

2000年度は、ほぼ1999年度と、同様の考え方及び同額程度とする。ただし、この予算では、毎年繰越金が減じて4~5年後には繰越金がなくなることから、会員の増加・会費の値上げ・講座等事業収入からの增收など、抜本的な対策が必要であり、なるべく早い時期にその対応を検討する。

## 7) 各委員会人事

(1)会誌編集委員会(会誌編集委員会名簿参照)

会誌編集委員会については、編集委員・専門編集委員の任期が2000年3月31日のため新体制を発足させる。

会誌担当役員については、玉井理事に就任をお願いする。

事務局長については、熊野現事務局長を留任とする。

(2)各委員会(各委員会名簿参照)

5ヶ年計画実施にともない設立された各委員会は、「交流委員会」がその活動強化を図るために4名の増員を承認する。他の委員会は変更ない。

## 5. 学術研究団体登録について

「日本学術会議事務局」によれば、学術研究団体登録の受付は、次回は3年後(平成14年、2002年)5月となる。

登録の要件は、最近3ヶ年間にわたり、

(1)構成員による学術研究の発表又は討論のための集会を年1回以上開催していること。

(2)学術論文の発表のための刊行物(査読制度必要)を年1回以上発行していること。

(3)運営及び活動に係わる方針を決定する総会を年1回以上開催していること。

よって、

①2002年申請を目指す。

②特に会誌の充実を図る。

## 6. その他

1) 主催者より要請のあった、2000年度開催の、

主催:水環境学会九州支部

講座名:シリーズ「水域生態系保全・創造のコンセプトと展開の技術」

に共催させていただく件を承認する。

2) 次回理事会は、2000年6月に開催する。

主な議題としては、2001年度以降のこととを含めた事務局体制、予算計画、名誉会員、国際交流等とする。

2000年2月28日現在

## 第2期「応用生態工学」会誌編集委員会名簿

(任期:2000年4月1日~2002年3月31日)

一氏名一

一所属一

一専門分野一

### 編集委員

1 (委員長)	竹門康弘	継続	大阪府立大学助教授:幹事	底生動物生態学
2 (副委員長)	北村眞一	継続	山梨大学教授:幹事	環境デザイン
3 (編集委員)	角野康郎	継続	神戸大学助教授:幹事	植物生態学
4 ( )	中村太士	継続	北海道大学助教授:副幹事長	林学、流域保全
5 ( )	田中 隆	継続	(財)都市緑化技術開発機構部長	造園学

6 (編集委員)	清野聰子	継続	東京大学助手	水圏生態・地形 学、環境計測学
7 ( )	尾澤卓思	新	(財)ダム水源地環境整備センター部長	河川工学・アセ スメント
8 ( )	池内幸司	継続	(財)リバーフロント整備センター次長	河川工学
9 ( )	浅枝 隆	継続	埼玉大学助教授	河川工学
10 ( )	清水義彦	新	群馬大学助教授	河川水理学
11 ( )	森 誠一	新	岐阜経済大学助教授:幹事	魚類生態学
12 ( )	島谷幸宏	新	建設省土木研究所河川環境研究室長:幹事	河川工学
13 (会誌担当役員)	玉井信行	新	東京大学教授:理事	河川工学
14 (事務局長)	熊野可文	継続	事務局長	河川工学
<b>専門編集委員</b>				
1 (専門編集委員)	矢原徹一	継続	九州大学教授	生態学・進化学
2 ( )	大迫義人	継続	姫路工業大学助教授	鳥類生態学
3 ( )	荒井秋晴	継続	九州歯科大学講師	哺乳類生態学
4 ( )	森野 浩	継続	茨城大学教授	水生無脊椎動物 学
5 ( )	松井正文	継続	京都大学教授	動物系統分類学
6 ( )	日置佳之	継続	建設省土木研究所緑化生態研究室主任研究員	造園学
7 ( )	松崎浩憲	継続	(株)建設技術研究所主任技師	河川水理学
8 ( )	足立敏之	継続	建設省河川局河川環境課建設専門官	河川工学
9 ( )	関 克己	継続	内閣官房内閣安全保障・危機管理室審議官	河川工学
10 ( )	小林 光	継続	環境庁長官官房審議官(自然保護担当):理事	林学
11 ( )	大槻光雄	継続	水資源開発公団環境室長	河川工学・ダム
12 ( )	澤田和宏	継続	(財)国土開発技術研究センター部長	道路工学
13 ( )	島崎由美	継続	新日本気象海洋(株)企画室長	植物生態学
14 ( )	井上 修	継続	(株)建設環境研究所課長	植物生態学
15 ( )	長崎 均	継続	日本工営(株)課長	生物学
16 ( )	古川整治	継続	(株)水建設コンサルタント取締役:幹事	河川工学
17 ( )	橋口大介	継続	(株)野生生物保全研究所首席研究員	鳥類生態学
18 ( )	風呂田利夫	新	東邦大学生物学科	海岸生態学
19 ( )	中井克樹	新	琵琶湖博物館主任研究員	魚類生態学・底 生動物生態学
20 ( )	岩崎敬二	新	奈良大学助教授	潮間帯生物の生 態学
21 ( )	山本晃一	新	(財)河川環境管理財団技術参与	河川工学
22 ( )	藤田光一	新	建設省土木研究所河川研究室長	河川水理学
23 ( )	遊磨正秀	新	京都大学生態学研究センター助教授	昆虫生態学・魚 類生態学
24 ( )	相崎守弘	新	島根大学生物資源科学部教授	陸水学・湖沼生 態学
25 ( )	松宮義晴	新	東京大学海洋研究所教授	水産資源学
26 ( )	東 信行	新	弘前大学農学生命科学部	魚類生態学・魚 道評価

2000年2月28日

### 応用生態工学研究会各委員会名簿

#### 1. 会誌編集委員会（別紙参照）

#### 2. 普及委員会——応用生態工学に関する講習会、現地見学会の企画

委員長： 鷺谷いづみ（東京大学教授）：理事

委員： 谷田 一三（大阪府立大学教授）：幹事長

委員： 長崎 均（日本工営株）課長

委員： 山北 泰典（パシフィックコンサルタンツ（株）中部本社部長）

委員： 橋口 大介（（株）野生生物保全研究所首席研究員）

#### 3. 交流委員会——応用生態工学に関する国内外の調査研究及び国際的学術交流、分野・業種間交流

委員長： 辻本 哲郎（名古屋大学教授）：理事

委員： 角野 康郎（神戸大学助教授）：幹事

委員： 清野 聰子（東京大学助手）

委員： 森 誠一（岐阜経済大学助教授）：幹事

委員： 浅枝 隆（埼玉大学助教授）

委員： 佐藤 宏明（建設省東北地方建設局岩手工事事務所長）

(新) 委員： 小川 鶴蔵（（財）リバーフロント整備センター部長）

(新) 委員： 萱場 祐一（建設省自然共生研究センター主任研究員）

(新) 委員： 尾澤 卓思（（財）ダム水源地環境整備センター部長）

(新) 委員： 高橋 和也（応用地質（株）課長）

#### 4. 研究開発委員会——自主的な調査研究活動、受託事業

委員長： 江崎 保男（姫路工業大学教授）：理事

委員： 中村 太士（北海道大学助教授）：副幹事長

委員： 北村 真一（山梨大学教授）：幹事

委員： 内村 好（（株）建設技術研究所文化技術本部長）

委員： 堀家 健司（新日本気象海洋（株）西日本支社部長）

#### 5. 技術検討委員会——調査研究活動に関する技術援助、理論・技術レベルの向上と評価

#### 6. 大会開催運営委員会——年次研究発表会、学術講演会、シンポジウム等の企画開催と運営

委員長： 谷田 一三（大阪府立大学教授）：幹事長

委員： 鷺谷いづみ（東京大学教授）：理事

委員： 島谷 幸宏（建設省土木研究所河川環境研究室長）：幹事

委員： 渡辺 晋（新日本気象海洋（株）生態解析室長）

#### 7. 幹事会：谷田、中村、角野、北村、島谷、竹門、古川、森

## 2. 福岡基礎講座「多様性と保全の生態学」開催報告

昨年(1999)11月26日、27日の両日、九州産業大学（福岡市）において開催された研究会基礎講座「多様性と保全の生態学」に実行委員の1人として参加させて頂いたので、同講座について私見を交えて報告する。

今回は西日本で初の基礎講座開催ということもあったためか、当初の実行委員会の予想を上回る200名を越す方々にご参加頂き大変盛況な講座となった（最終確認受講者236名）。

参加者もコンサルタント業務の方々をはじめ建設会社、財団法人、行政、大学関係者まで多岐にわたり、生態学の基礎講座に対する潜在的な需要の高さ

を改めて実感する結果となった。願わくはもう少し多くの学生諸君にも受講して頂きたかったというのは贅沢な悩みか。

1日目（26日、金曜日）は筑波大学の鷺谷いづみ講師より「生物保全の生態学」というタイトルで3時間の講義を頂いた。予め参考図書として挙げて頂いた「新・生態学への招待 生物保全の生態学」に即した、保全生態学の基本的な内容についての講義であった。1限目はサクラソウ、ヒイラギ、針葉樹などを例にそれぞれの繁殖・生存に対する戦略についてのお話頂いたのに加え、カエルの世界的な減少傾向など今日問題となっている点にも言及された。2限目は絶滅の問題についての講義が中心となり、リヨコウバトやカッコウソウの例が示され、絶滅に至る原因の複雑さが指摘された。また希少種に関する

る概念として1. 地理的分布、2. ハビタット、3. 個体群の3要素が挙げられた。3限目は近交弱勢、有効個体数の概念等についての説明の後、個体群存続可能性分析（PVA）についてのお話があった。ここでは存続可能な個体群サイズ（MVP）を明らかにするための理論的な検討やシミュレーションモデルによる分析について、モデル計算結果などを例示していただきながらの講義となった。例示された結果から環境確率変動性を考慮する事の重要性、及び保全のためには十分な有効個体数・個体群を維持することの必要性を指摘された。

2日目（27日、土曜日）はまず大阪府立大学の竹門康弘講師から、「河川生態系の構造と機能」「河川生態系への人的インパクト」というタイトルで講義頂いた。参考図書としては「渓流生態砂防学」を挙げて頂いた。1時限目は河川の位数や0次谷といった河川・渓流の基礎単語の説明から始まり、落葉等の栄養供給から始まる河川生態系の成り立ちなどについての講義となった。淵→瀬→淵の間に1つの生態系が成り立ち、河川ではこれを繰り返していること、増水などの攪乱は生態系の維持に必要であること、岸際でも場所ごとに特徴的な分布が存在すること、底生動物の分布も各地形要素毎に特徴があることなどが指摘された。2限目ではナミヒラタカゲロウを例に、源流間での遺伝的交流の可能性や、本谷における高い遺伝的多様性の維持についてのお話があった。さらに河道付近の植生によるオーバーハング環境の提供など、河川生態系における生物間の関係などについても触れられた。3時限目は竹門講師御自身のモンカゲロウの産卵に関する調査結果から、その場所的産卵パターンや砂防堰堤が産卵に及ぼす影響などについて事例が示された。さらにそのような結果を踏まえ、目標とする河川環境（淵・瀬・土砂供給など）を砂防堰堤や森林等の調整により保全を図る、との考え方が示された。

2日目午後には姫路工業大学の江崎保男講師から

「水田動物群集の特徴と保全」というタイトルでトンボやカエル等を例に挙げながらの講義を頂いた。この講義では「水辺環境の保全 生物群集の視点から」を参考図書として挙げて頂いた。トンボの水田での生育にはそのライフサイクルパターンが重要であり、水田で生活環をまとうできるのはアキアカネ等の秋種である事や、周辺の溜池等で産卵できる環境であれば春種や夏種もトランジットやビジターの形で水田を訪れる事が可能である事等を指摘された。カエルについては、圃場整備後のニホンアマガエルの個体数減少などについて言及され、カエルの産卵のための移動に対する障害物の害などの指摘もあった。また、水田における二次生産の利用についても言及され、水田の更なる有効利用の手段についても提案があった。講義の締めくくりとして、1. 生活史（ライフサイクル）とハビタット、2. アクセス（ハビタット・水系の連続）、3. レフュージ（避難場所）、4. 一時的水域、二次生産、といったキーワードが挙げられた。

さて、参加者には本講座に関するアンケートにご協力頂いたが、「基礎講座の継続的・定期的な開催」や「地方での開催」を望む声が多く、本基礎講座は概ね肯定的に受け入れられたようであった。しかしいっぽうでは、「より実践的な事例の紹介」等を望む声もあり、直接的に日常の業務等へ応用可能な「応用講座」的内容も求められているようである。また基礎講座以外では、「現場見学会などを通じた事例の紹介」や「インターネット等を通じた情報発信としての研究会の役割」を望む声も多く見られた。このような意見は研究会として今後検討すべき点と考えられる。

末筆となつたが、限られた時間の中で非常に有意義な講義をして頂いた講師の方々と、ご多忙の中、本基礎講座に参加して頂いた方々にお礼を申し上げ、本報告を閉じさせて頂く。

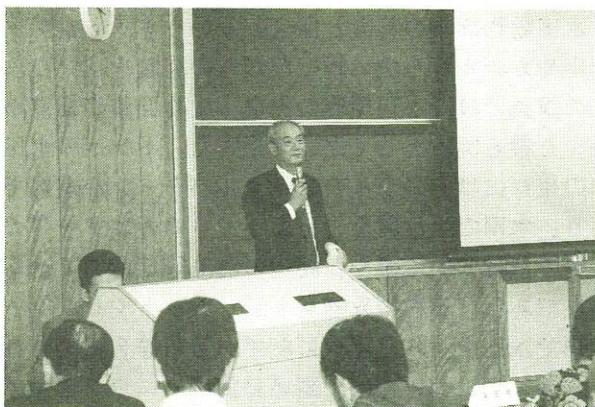
福岡研究実行委員会 井上 徹数（九大院・工）



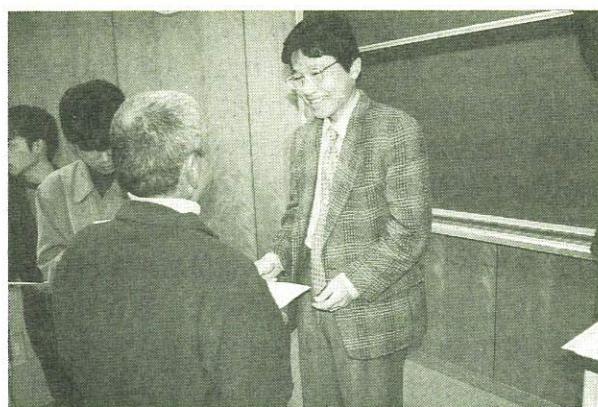
鷺谷講座主任の講義の様子



竹門講師の講義の様子



・講義最後に、小野役員（監事、九州大学名誉教授）  
のお話



・受講者に修了証を手渡す江崎講師



・福岡基礎講座終了後 九州産業大学会場校舎前で記念写真 (1999.11/27)

### 3. 名古屋「多自然型川づくりシンポジウム」開催報告

2000年1月13日（木）名古屋市吹上ホール（9階展望ホール）において、応用生態工学研究会主催「多自然型川づくり」（共催：土木学会水理委員会河川部会）を開催し、165名の参加を得て終了しました。

今まで各地で実施してきた基礎講座等で、参加者へのアンケートを実施した結果、「多自然型川づくり」に関する講習会開催の希望が大変多く出されました。しかし、その技術は必ずしも体系立てられていないし、むしろマニュアル・ガイドライン化が、個々の河川の特性を生かした「多自然型川づくり」が妨げられるとの考え方があり、“マニュアルの講習会”ではなく、「多自然型川づくり」についてシンポジウムやフォーラムの形で、土木・生態学・官・学・民等関係者が議論する場を持つべきだ、との考え方方に至りました。

応用生態工学研究会では、研究会の活動を具体的に推進して行くために各種委員会がもうけられています。その中の「交流委員会」（辻本委員長）は、国際交流とともに、国内の関連する異分野・異業種等との交流を使命としており、名古屋「多自然型川づくりシンポジウム」の中心となり、講師（コーデ

ィネーター・パネラー）の中核を担っていただきました。

#### [プログラム及び参加講師]

10時開会 開会にあたって

辻本哲郎（名古屋大学）

10：05 セッション1 多自然型川づくりはどのように変遷してきたか

10：05 セッション1へのイントロダクション  
辻本哲郎

10：10 多自然型川づくりの今後の課題  
吉村伸一（吉村伸一流域計画室）

10：35 多自然型川づくりの経緯と課題  
池内幸司（(財)リバーフロント整備センター）

11：00 パネラーとコーディネーターの討議

11：40 フロアとの議論

#### —昼休み—

13：05 セッション2 多自然型川づくりを支える学術・技術として応用生態工学はありますか

13：05 セッション2へのイントロダクション  
——多自然型人工河川の可能性  
浅枝 隆（埼玉大学）

13：10 「多自然型川づくり」への植物学の視点

からの提案

角野康郎（神戸大学）

13:35 多自然型川づくり：自然への配慮とは何か

森 誠一（岐阜経済大学）

14:00 パネラーとコーディネーターの討議

14:40 フロアとの議論

15:10 総括討議（全員＋フロア）

15:50 総括・閉会 辻本哲郎

シンポジウムは、講師達が事例を紹介しながら、熱心に各々の「多自然型川づくり」論を展開し、またフロアーからは、土木と生態の共同研究の在り方や、流域全体として考えるべきとか、市民を含めた推進の必要性など、自らの経験に基づいた提案や問題提起が次々と出され、とても時間内では議論し尽

くせないほど盛り上りました。

この時の議論は、各講師がとりまとめ、会誌「応用生態工学」に近々報告します。今後この「多自然」シリーズについては、矢作川など現地において議論を続けて行く予定です。また、是非御参加下さい。

ここでは、以下写真でその様子を報告するにとどめます。

最後に、開催が決まってから（シンポジウムの案内書・受講申込書ができるのが12月10日）ほぼ1ヶ月（暮れ正月をはさんで）という、あまりにも準備期間が短い中、参加していただいた方々、および参加者募集活動・準備・当日の各種係りに奔走していただいた「名古屋研究実行委員会」（8機関25名）の皆様に感謝いたします。（事務局 熊野）



・総括討議の様子



・フロアーの様子



・辻本コーディネーター



・吉村パネラー



・池内パネラー



・浅枝コーディネーター



・角野パネラー



・森パネラー



・フロアーからの意見

#### 4. 仙台基礎講座開催案内

応用生態工学研究会では、今まで東京、名古屋、大阪、札幌、福岡と、各地で基礎講座・現地セミナー・シンポジウムなどを開催してきました。

そこで、2000年度の最初の活動として、下記のように東北・仙台において生態学の基礎講座を開催することになりました。まだ、細部は検討調整中ですが、東北・仙台の方々には是非参加をお願い申し上げます。第1次として受講申込の受付を開始します。詳細が決まりましたら、4月初め頃再度御連絡いたします。

講座名称：仙台基礎講座「自然環境と応用生態工学（仮称）」

開催日時：2000年（平成12年）5月26日（金）  
9:30～17:30

会場：東北大学医学部「艮陵（ごんりょう）会館」

〒980-0873 仙台市青葉区広瀬町3-34

講師：西平 守孝（東北大学大学院理学研究科  
生物学専攻教授）

内藤 俊彦（東北大学大学院理学研究科  
附属植物園助手）

鈴木 孝男（東北大学大学院理学研究科  
生物学専攻助手）

小笠原 嵩（秋田大学教育文化学部自然  
環境講座教授）

小野 勇一（九州大学名誉教授、前日本  
生態学会会長）

（テーマ及び各講師の講義題目は検討中）

受講料：（検討中）

受講申し込み：第1次申し込みとして受け付けを  
開始します。

受講希望者は、氏名・所属・連絡先（〒、住所、  
電話、FAX、メール）、会員番号（非会員も受講  
できます）を明記の上、事務局まで郵便・FAX・  
E-Mailで申し込み下さい。定員200名。

なお、4月初めに詳細決定後第2次の開催案内  
書を作成し、第1次申し込み者にお送りします。

申し込み・問い合わせ先：

応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5第7麹町ビル  
226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520

E-mail : see@blue.ocn.ne.jp

（追）なお、仙台で基礎講座を実施するにあたって、  
仙台（及び周辺）在住者により「応用生態工学  
研究会 仙台研究実行委員会」を設立準備してお  
ります。この実行委員への参加希望者も、合  
わせて事務局まで申し込み下さい。

#### 5. 国際交流・海外学会等への派遣者募集！

応用生態工学研究会・交流委員会では、「5ヶ年計画」に基づく実施方針で、海外で開催される関連学会等への派遣を計画していますが、2月8日の第10回理事会で2000年度（平成12年度）の実施が決められました。下記のように、募集を開始いたしますので、2000年3月20日までに事務局まで申込み下さい。

##### 【応用生態工学研究会 海外学会等への派遣者募集要綱】

1) 目的：応用生態工学研究会では、その規約にも示しているように、「応用生態工学に関する国際的学術交流」を、研究会活動の1つの柱にしている。ここに、会員から希望者を募り、海外で開催されている関連する学会・シンポジウム等に派遣参加していくだき、その内容を全会員に報告してもらうものである。

2) 派遣内容：2000年度においては、2～3名を派遣することとし、派遣先としては以下2学会から選択するものとする。

##### A. (名称)

RIVER RESTORATION

EIGHTH INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON  
THE ECOLOGY OF REGULATED STREAMS

(開催場所) フランス トールーズ

(開催期間) 2000年7月17日～21日

(内容) ダム下流の流量コントロールと河川  
に関わる様々な課題。

(申込み期限) abstractは1999年12月15日。

よって、まだ申し込みでない方は、  
論文発表はできない。

##### B. (名称)

ASLO 2000 Aquatic Sciences Meeting

(主催)

American Society of Limnology & Oceanography

(開催場所) デンマーク・コペンハーゲン

(開催期間) 2000年6月5日～9日

(申込み期限) 2000年1月15日

登録は2000年4月1日まで

その後の申込みも可能

(内容) 湖沼と海洋の生物及び化学現象が主

##### 3) 応募条件：

- ①派遣旅費は、2000年度は総額30万円以内とする。
- ②主催者への参加手続き、旅行手続き（国際航空便、宿泊等）は全て派遣者が行う。
- ③会議等に現地で参加し、帰国後応用生態工学研究会にその内容を報告書にとりまとめて提出す

る。報告内容は、ニュースレターあるいは会誌に掲載する。

④旅行中の事故などについては、本研究会は責は負わない。

4) 応募資格：

- ①会員であり、応募条件を理解していること。
- ②技術者及び若手研究者で、専門分野等は問わない。

5) 申込み：

会員番号・氏名・所属・連絡先（〒、住所、TEL、Fax、E-mail）・年令・男女・専門分野・希望派遣学会等（AかBを記入）、および派遣希望理由を派遣者にとっての意義が具体的にわかるように、計A4一枚（書式自由）にまとめて、郵送・FAX・E-mailで申し込む。

6) 申込み期限：2000年（平成12年）3月20日事務局必着

7) 申込者には、受付確認の連絡を事務局からします。

8) 人選は「交流委員会」で審査し、理事会にて決定。申込者全員に審査結果を連絡する。

(追) <賛助会員等への依頼文>

機関長・所属長各位

応用生態工学研究会への日頃よりの御支援に感謝いたします。

さて、当研究会では、国際交流の一環として、会員を海外で開催される学会・シンポジウムに派遣し、そこで学んだ成果を全会員に報告してもらうことになりました。多忙にして経済環境が厳しい中大変恐縮ですが、貴機関に所属する会員がこの派遣に募集希望の際には、当研究会からの正式の派遣であり、少ないながら若干の渡航費の援助を予定しておりますので、御協力頂きたく、お願い申し上げます。募集期間が短く（3月20日申込み期限）大変恐れ入ります。

## 6. 国際交流計画による招聘

### 【応用生態工学研究会 国際交流招聘計画案】

1) 全体タイトル：

『応用生態工学の国際的ネットワークの構築』

2) 目的：

当研究会は、「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」を共通の目標に生態学と土木工学の基礎知識および実際問題についての研究成果をもとに、両分野の関係者が共同して、それらの境界領域に新しい理論・知識・技術体系である「応用生態工学」を発展・展開させることを目的に平成9年（1997）10月15日に発足した。

発足以来、総会・研究発表会の開催、各地での基

礎講座・シンポジウム・現地セミナーの開催、ニュースレターの発行、原著論文等を掲載した会誌「応用生態工学」の発行などの活動を展開し、現在（2000年2月）会員数は、正（学生）会員971名、賛助会員60法人となっている。この間、国内的活動として、生態学・土木工学・水産学・林学等関連する各分野の研究者・技術者等が、共通の課題、共通の現場について、共通の“ことば”によって議論を重ねてきている。

当研究会の規約には、「応用生態工学に関する国際交流」を主要活動の1つ掲げている。「応用生態工学」の発展・展開を図るために、諸外国における「応用生態工学」に関連した学術研究及び実施事業の具体的姿を知り、併せて人的組織的交流を進めて行くことは、必要不可欠である。このため1999年度より、海外で開催される関連学会或いはシンポジウム等に技術者或いは若手研究者を派遣することを決め、2000年度にその実施を計画している。

今回さらに、今後5年間をかけ、海外から有識者などを招聘して、海外における取り組みを紹介・解説していただくとともに、日本における自然環境保全の現状及び応用生態工学としての取り組み状況を説明、相互理解を促進するとともに、応用生態工学の研究・実践のための国際的ネットワークの構築を図るものである。

3) 年次計画：

- 第1年度（2000年度）【北米】
  - 第2年度（2001年度）【ヨーロッパ（スイス・ドイツ等）】
  - 第3年度（2002年度）【オーストラリア】
  - 第4年度（2003年度）【中国・東アジア】
  - 第5年度（2004年度）【ロシア・東欧圏】
- （第1年度は北米として、以後の年度は準備調整次第により順番対象国の変更はある）

4) 各年実施計画：

- (1)招聘者の選定：各国において、応用生態工学に関連した研究・実施において、顕著な業績或いは有益な成果を示した個人又は団体を選定する。これは、交流委員会幹事会・理事会の審議を経て決定する。
- (2)事前討議の実施：招聘者には、「応用生態工学」に関する情報を伝え、当研究会関係者との事前討議を実施する。
- (3)公開討論会の開催：広く一般に公開した討論の場を設け、招聘者からの報告とともに当研究会関係者との討論を行い、相互理解を深める。
- (4)現地見学の実施：招聘者と当研究会関係者による現地見学を通じて、より具体的な理解を深める。

(5)報告書等の作成：以上の成果は、各年報告書としてまとめるとともに、ニュースレター・会誌に掲載し、学術研究および現場での技術展開に役立つ資料として提供する。

#### 5) 資金計画：

第1年度である2000年度は、『河川整備基金』

((財)河川環境管理財団)を申請する。

申請費用は、招聘者の謝金、航空費、滞在費、同時通訳、翻訳まとめ費用等とする。

なお、この河川整備基金或いは他の資金を得られない場合は、別途検討する。

#### 6) 第1年度(2000年度)計画：

テーマ『河川生態系の保全：その思想と実践』

北米から招聘する有職者との調整を進める。

### 7. 会誌編集委員会報告

会誌編集委員長 竹門 康弘(大阪府立大学)

2000年1月31日、第5回会誌編集委員会を開催し、その検討・提案内容は2月8日の理事会に報告し承認されました。以下、その内容を報告します。

日時：2000年(平成12年)1月31日(月)

12:00～17:00

会場：麹町会議室

出席：竹門、北村、浅枝、池内、熊野

#### 1) 新組織(2000年4月1日以降) [会誌編集委員会名簿参照]

編集委員は、2名交代のうえ2名増員し、10名から12名体制となる。

専門編集委員については、5名交代のうえ4名増員し計26名となる。

#### 2) 3巻1号の特集記事について

特集タイトルは、「日本の沿岸生態系保全と土木工学～特に海岸の現状と問題点」に変更する。特集の最初に「沿岸」と「海岸」の用語の差異について、生態学的・工学的・水産学的な考察を加えることにより、沿岸生態系や海岸について応用生態工学における位置付けを明確にすることとした。

#### 3) 3巻2号以降の編集方針(特に特集の方針と原著論文依頼)

以下の特集について検討を進めている。

「魚道評価」(森)

「多自然型川づくりの評価」(辻本・池内)

「里山とビオトープ考」(岩崎)

「河口堰の評価」(竹門・足立)ほか

#### 4) 英文校閲

これまでの会誌で、英文に問題があることが指摘されている。

(1) 基本的には、著者の責任において、印刷可能なものを完成させる。

(2) もし、著者が英文を完成できず、翻訳を依頼するあてがない場合、プロを紹介できるように、編集委員会で探しておくる。費用は著者負担とする。

#### 5) 名古屋多自然シンポについて

1月13日名古屋で実施した、「多自然型川づくりシンポジウム」については、講演者に「意見」として計10ページ前後にまとめ、3巻1号に掲載する。

#### 6) 学術刊行物申請について

現在申請手続き中。正式に2000年6月ごろ申請し、10月ごろ審査結果ができる。

#### 7) 会誌の寄贈について

現在、毎回下記2件につき寄贈している。

①国立国会図書館(2冊) ISSN1344-3755

②科学技術振興事業団(1冊)

#### 8) 国際交流招聘計画について

会誌編集委員会としては、毎年の企画の専門分野や人的関係のある編集委員を1名張り付け、会誌へ掲載する担当編集委員とする。

### 8. いろいろなニュース

#### (1) 学会・シンポジウム開催案内

以下、会員から2学会の開催案内が事務局に届きましたので掲載させていただきます。

#### ・第1回 生態系モデリングシンポジウム

「生態系とシミュレーション」

主催：国際生態系モデリング学会(ISEM)

期日：平成12年4月3日(月)

場所：東京都千代田区 学士会館(地下鉄神保町駅前)(03)3292-5931

目的：

国際生態系モデリング学会日本支部は、1984年8月につくば市で開かれた ISEM(International Society for Ecological Modeling) の研究発表大会を環境庁環境研究所(当時は公害研究所)が主催したときに設立されました。以来15年が経過し、保全生態学の台頭、ミチゲーションや多自然型川づくりといった工学分野での生態系への関心の高まりなど、生態モデルをとりまく環境も大きく変わってきたように思います。

本シンポジウムでは、日本で活躍する各方面の生態モデルの第一人者の方々に研究の最前線についてご講演いただき、日本の生態モデルの現状を浮き彫りにすると同時に、各分野の相互理解を深め、異分野の生態系モデルをつなぐ基本的学理を構築することを目的としています。

ふるってご参加下さい。

プログラム：

9:30 受付

10:00-10:10 開会挨拶と趣旨説明

ISEM日本支部長 楠田哲也  
(九大院・工)

10:10-11:00 「生物集団の絶滅リスク評価と保全」  
巖佐 康 (九大院・理)

11:10-12:00 「森林の個体ベースモデルー木を見て森を見て」 竹中明夫 (国立環境研)

12:00-13:00 昼食

13:00-13:50 「都市緑地の害虫アメリカシロヒトリの発生パターンと年間世代数の進化：時間構造化モデル」  
嶋田正和 (東大院・広域システム)  
山中武彦 (東大院・農)

13:50-14:40 流量増分式生息域評価法(IFIM)について 玉井信行 (東大院・工)

14:40-15:00 休憩

15:00-15:50 北太平洋の低次生産生態系モデル 岸 道郎 (北海道大・水)

15:50-16:00 閉会挨拶 ISEM日本支部幹事長  
関根雅彦 (山口大院・工)

参加費：会員3,000円、非会員8,000円 (いずれも  
昼食代含む)

申し込み方法：

氏名、所属、連絡先住所・郵便番号、電話番号、FAX番号、e-mailアドレス、主要所属学会、昼食の必要の有無を明記の上、FAX、葉書、E-mailまたはホームページにて申し込んでください。(会場周辺は昼食時に混雑しますので、会場で昼食を提供します。)

申し込み締め切り：2000年3月15日 (水)

予定人員：100名

申し込み・問い合わせ先：

ISEM日本支部長 楠田哲也 (九大院・工)

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院工学研究科都市環境システム工学  
専攻

・日本ペドロジー学会主催公開シンポジウム  
「わが国の失われつつある土壤の保全をめざして～レッド・データ土壤の保全～」

開催日時：平成12年3月16日 (木)

9:30-17:30

開催場所：明治大学駿河台校舎 リバティー  
タワー1階 リバティーホール

主 催：日本ペドロジー学会

後 援：環境庁、国立科学博物館、(財)日本生態系協会、(社)日本土壤肥料学会、(社)日本環境アセスメント協会

概 要：

日本ペドロジー学会が数年前から取り組んでいた、我が国に存在する消滅しつつある土壤のレッドデータリストの取りまとめ作業が終了しました。その成果を、専門的な立場から土壤学者数名が講演し、さらに、自然環境保全にとってなくてはならない土壤の保全をどのように押し進めていくことがのぞましいかを専門家が講演し、最後に総合討論としてパネルディスカッション形式で進めています。

参 加 費：無料

申しこみ：どなたでも参加できますので、当日会場へお越し下さい。

照 会 先：筑波大学応用生物化学系 田村憲司

(TEL : 0298-53-7201, FAX : 0298-53-4605

E-mail : tamura@agbi.tsukuba.ac.jp)

プログラム

9:00- 9:30 開場 受付

9:30-10:00 土壤のレッドデータブックの作成について  
菊地晃二 (日本ペドロジー学会会長、帯広畜産大学教授)

10:00-11:00 我が国に分布する特徴的な土壤について  
永塚鎮男 ((有)日本土壤研究所代表取締役)

11:00-12:00 緊急に保護されなければならない土壤について  
平山良治 (国立科学博物館主任研究官)

12:00-13:00 休憩

13:00-14:00 生態系保全と環境N G O  
池谷奉文 ((財)日本生態系協会会長)

14:00-15:00 土壤の保全と環境影響評価  
中山隆治 (環境庁企画調整局環境影響評価課課長補佐)

15:00-16:00 かけがえのない土壤の保全をめざして  
松本 聰 (東京大学大学院教授)

16:00-16:15 休憩

16:15-17:30 総合討論 (パネルディスカッション)  
座長 三枝正彦 (東北大学教授)  
司会 上月佐葉子 ((株)パシフィックコンサルタンツ)

## (2) 新著紹介

- ・「潮間帯の生態学（上・下）」デイビッド・ラファエリ&スティーブン・ホーキンス著、朝倉彰・訳、文一総合出版、上巻（311頁）3800円、下巻（204頁）2700円、  
待望の翻訳ついに出版される！

海岸の生物に興味がある日本人にとって待望の、そして、海岸の自然・景観の保全や復元に携わる人々にとって必読の書が、ついに翻訳された。この本の原題は、Intertidal Ecology。著者の2人は、1970年代後半から、イギリスで、軟体動物を中心にして海岸の生態学を活発に研究している中堅の生態学者たち。Chapman & Hallから1996年に出版され、海岸の環境と生物の生態学的な基礎知識をわかりやすくまとめた格好の入門書かつ専門書であり、初学者にも専門家にも役立つ好著である。浅海・沖合い・深海、底生動物や浮遊生物・遊泳生物など、海洋の自然全般を対象として、広く浅く海洋生物学を解説した書物は、内外を問わず過去に数多く出版されていた。しかし、人間にとって大変に身近で、近年の環境問題では大きくクローズアップされてきた海岸の自然と生物に関する解説書は、これまで世界的に見ても大変に少なかった。

この本が出版された当時には、「いい本だ！」という声が、私の周囲でもあちこちで聞かれたものである。私も、ひそかに、この本の翻訳を考えていたのだが、朝倉さんに先を越されてしまった。

### 本書の構成と特徴

本書は全8章からなり、海岸環境の特徴と環境条件の変化の詳しくわかりやすい解説から始まって、海岸生物の分布パターンとその成因、生物群集の動態や競争、共生、寄生など種間相互作用の様態を多くの図を使ってわかりやすく説明している。下巻では、海岸生態系の概説と人間活動の影響、その保全と研究方法とが、順を追って、丁寧に解説されている。世界的に重要な研究成果は、ほぼ余すところなく取り上げられている点が大変にうれしい。また初心者にもわかりやすい概念的な図が数多く用いられ、重要語句は太字体にして、記憶に残りやすい工夫がなされていることも大きな特徴である。

### 訳本の工夫のすばらしさ

しかし、今回出版された訳本は、原著よりもさらに読者に配慮した、わかりやすい工夫が凝らされている。訳者の朝倉さんは、独自に全部で54ヶもの「ボックス」を設け、専門用語や重要語句を選別してその中で丁寧に解説し、その解説に関連した参考文献までをも掲載しているのだ。もちろん、訳文は、わかりやすくこなれた日本語になっており、「ボックス」の中の解説の文章も、簡潔にして明瞭だ。

また、この分野では、英語のテクニカル・タームにうまく対応した日本語がないことも多い。そんな事情に配慮して、重要な専門用語が出てきた場合には、逐一、「干出する(emersed)」というように、訳語に対応した原語も数多く同時に書かれている。初学者には大変にうれしい工夫である。

まだまだある。各章の末尾に、その章の内容に関する深い日本人または日本で行われた研究の参考文献がリストされている。これがまた、大変に役に立つ。原書はもちろん、英語圏の研究者の成果を中心に解説されている。しかし、この本では紹介されていない日本人の研究成果も、世界的に見て劣らないものも多い。また、イギリスやUSAと日本とでは、生物の種や潮汐条件、海岸環境をめぐる情勢なども異なっていて、海外の研究成果がそのままうまく日本での研究にあてはまるとも限らない。そんな時、この「日本での参考文献」を調べることで、各章に書かれた内容が日本ではどのように研究されているのか、あるいはまだ研究されていないのかが、すぐに分かるようになっている。手の届かない、かゆい所にも手が届くような工夫が凝らされている。

### 名「訳本」を是非一度手に取って！

こういった工夫は、数多くの科学書の訳本と本書との一線を見事に画いている。わかりやすく簡潔な訳文をただひねり出すだけではなく、専門用語や重要語句を選別して、ボックスを設けて解説し、日本の研究もリサーチして参考文献として掲載する。朝倉さんのこのアイデアと努力には、心から敬意を表したい。こんな創意工夫にあふれた科学書を、私はあまり知らない。

是非一度、手にして見て欲しい。そして買って欲しい。そんな熱い声援を送りたくなるような、「訳本」としての名著である。[岩崎敬二]

・「魚の分類の図鑑—世界の魚の種類を考える」、上野輝弥・坂本一男、東海大学出版会、本体3800円：最古の脊椎動物の姿を留めているヤツメウナギから、もっとも特殊化した硬骨魚であるフグまで、いわゆる魚と呼ばれるものを、すべての目あるいは亜目の分類単位で並べた本は、大図鑑を除いてなかった（恐らく世界的にも）。目あるいは亜目レベルで並べられると圧巻である。ちなみに、その下の分類単位である科についても、代表的な種のカラー写真が収載されている。150ページの中に世界の現生種のカラー写真が300点以上。通覧するだけでも魚類の多様性が理解できる。目あるいは亜目の解説とカラー図版が、見開きのページに配置されており、使いやすい。命名者は省略されているが、学名（ラテン名）も丁寧につけられている。目次が魚のカラー写真というのも、固い分類関係の本のイメー

ジを抜けている。魚の系統と進化の解説、骨学を含む形態説明もなかなか洒落ている。魚の分類の基本を学びたいという人にはもちろん最適な本だが、市場での魚調べにも役立ちそうだし、水族館や水辺に持っていくのも悪くない。また、酒席での魚の分類学や骨の形態学入門といった利用法もおもしろそうだ。残念なのは、収載されている種の索引がないことで、これはかなり不便。最後にクイズ。ヤツメウナギ、ウナギ、フクロウナギ、ヌタウナギ、シギウナギ、アナゴ、ウツボ、タウナギ。これらを、系統的に近いものにまとめるとどうなるか。

[谷田一三]

・「土石流災害」、池谷 裕、岩波書店（新書新赤版640）、本体700円：日本の河川における災害のうち、人命にかかる災害の7～8割が土石流によるものとのこと。マスコミ報道などから受けたる評者の印象とも一致する。著者は、建設省での砂防行政の責任者。現場での経験や研究成果も盛り込まれている。1993年に建設省がまとめた土石流被害の危険がある渓流は、全国で79318（！）。渓流の勾配と堆積土砂量から算出されるとはいっても細かい数字が判っているとは意外だった。土石流の速度は10m/秒に達するという。発生してからでは逃げることは困難。発生防止と予測が重要になる。砂防ダム、川底の固定（床固め）、緑化も伴う山肌の保護（山腹工）などが、防止のためのハードな技術。予測については、地形と降雨量から警戒信号は出せる。それに上流に仕掛けるセンサーも開発されている。それでも、人命に係わる被害がなくなるのは、なぜだろうか。山奥の無駄な砂防ダムに費やされる税金を、居住制限に対する補償や避難体制の確立にまわすことが必要かもしれない。1970年代にはじめて科学の対象となった土石流が、この短い間でここまで判ったことに対して、著者を含む工学技術者に敬意を表しつつも、かなり大きな発想の転換によるハードとソフトの技術の開発が必要と感じた。

[谷田一三]

・「熱帯雨林」、湯本貴和、岩波書店（新赤版新書624）、本体740円：著者は、屋久島、アフリカ（旧ザイール、カメルーンなど）、そして東南アジアと、雨林（レインフォレスト）の林冠を、13年間渡り歩いた活動的な研究者。それにしても、その間の5年間を現地調査に費やすことができたとは、実にうらやましい限りである。植物とその花粉媒介、種子散布の動物たちとの相互関係の研究では、世界の第一線にいる。東南アジア熱帯、とくにボルネオの研究は、1997年現地への途上に飛行機事故で遭難した井上民二さんに誘われて参加したという。井上さん亡き後は著者がこの研究チームを支えてきた。

短いながらも本書は、熱帯雨林の全体像を知るには最適である。白亜紀中期から1億年の歴史を持つ熱帯雨林、その歴史が生み出した共生の卓越する生態系についても、またその森林が人間活動によって危機的に陥っている現状や将来への展望もよく書かれている。しかし、著者の本領が發揮されているのは、林冠の生態研究、生物間相互作用、それに一斉開花の章だ。未知の世界であった林冠の研究に実に様々な方法があること、しかし基本は木登りとの説明は明解である。動物による種子運搬の研究では、ゾウや昼行性のサルなどの絶滅がそれに種子運搬を頼っていた大きな果実をつける植物の絶滅を招くとの説明も説得力がある。熱帯雨林などでの一斉開花については多くの仮説が提出してきた。一斉に咲くことで、多様で多くの花粉媒介動物を呼ぶことができるという動物媒促進仮説を、実証的な資料をもとに支持してはいるが、「わたしたちは有名な一斉開花という現象を、一度モニターしたにすぎない」と、さらなる長期観測の必要性を強調している。つぎには、もう少し対象を絞った一般向けの新書を書いてほしい。 [谷田一三]

・「水辺のさんぽ」、新学社編集部（編）、新学社、学校納入価格220円（消費税を含む）：「滋賀の水草、図解ハンドブック」などの水生生物図解シリーズを刊行してきた新学社が、中学校の総合学習の副読本として刊行した。河川、農業水域（水田、溜池など）、湖沼といった、水辺とそこに棲む生物を小冊子ではあるが、カラー写真と図を使ってうまくまとめてある。景観や水質についての、実習や考え方させるための資料も含まれている。渓流・平地河川・都市河川・農業水域・湖沼の5つの水辺について、それぞれに20葉ほどの生物のカラー写真が配置されていて、水辺観察の入門として悪くない。学校教育用の図書だが、価格も含めて市民活動などのテキストにも使いやすいだろう。書店での販売はないので、新学社（075-581-6111）への直接注文で入手することになる。 [谷田一三]

## 9. 事務局報告

総会・研究発表会、基礎講座、現地セミナー等各地で活動を展開しておりますが、基本的にこの活動を支えて頂いているのは、各地の研究実行委員会のメンバーです。この中から、研究発表会への発表、会誌への投稿、各委員会への企画参加等が生まれております。

2000年度（平成12年度）も、各地での活動を通じて研究実行委員会を強化して行きたいと考えておりますので、実行委員としての参加を会員の皆様にお願い申し上げます。

[2000年2月29日現在会員数]

正（学生）会員	971名
賛助会員	60法人

[研究会活動]

1999.12.16	・仙台にて基礎講座下準備 ～17
12.20	・名古屋実行委員会（名古屋第一ホテル）名古屋多自然シンポ打ち合わせ
12.23	・琵琶湖大会（第4回総会・研究発表会及び琵琶湖現地見学会）企画会議（京都大学山岸研究室）
2000. 1.13	・名古屋「多自然型川づくりシンポジウム」（名古屋市吹上ホール・展望ホール）参加者165名
1.20	・第11回幹事会（大阪府立大学谷田研究室）
1.31	・第5回会誌編集委員会（麹町会議室）
2. 8	・第10回理事会（麹町会議室）1999年度総括、事務局体制（現体制延長）、名誉会員、2000年度事業計画（講座

セミナー等、第4回総会・研究発表会、会誌編集、ニュースレター発行、海外関連学会への派遣、国際交流招聘計画、奨励研究、仮予算、会誌編集委員会新人事）、学術研究団体2002年5月申請、水環境学会九州支部主催「シリーズ『水域生態系保全・創造のコンセプトと展開の技術』」への共催等、審議決定。

- 2.16 ・仙台にて基礎講座準備活動  
～17
- 2.29 ・ニュースレターNo.10発行
- 3月末 ・2000年度年会費納入
- 2000年度（平成12年度）研究会活動予定——
- 5月26日 ・仙台基礎講座『自然環境と応用生態（金）工学（仮称）』  
東北大学医学部「艮陵会館」開催予定
- 5月末 ・会誌3巻1号発行予定  
・会誌3巻2号原著論文・総説投稿期限目安
- 7月末 ・（同上）短報投稿期限目安
- 8月末 ・（同上）意見・用語解説・書評投稿期限目安
- 9月頃 ・『応用生態工学・現地ワークショップin札幌（仮称）』開催予定
- 10月7日 ・第4回総会・研究発表会「滋賀県立琵琶湖博物館」開催予定
- 10月9日 ・琵琶湖現地見学会開催予定（体育の日）
- 10月末 ・『応用生態工学・現地ワークショップin矢作川（仮称）』開催予定
- 11月末 ・会誌3巻2号発行予定

## 応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル（2F 226号室）

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see@blue.ocn.ne.jp ホームページ: <http://www.ecesj.com/>

[地下鉄有楽町線麹町駅2番出口徒歩3分]

[地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分]

[JR中央線四ツ谷駅徒歩10分]